

島田正治

避寒できていた多くのカナダ人が、この四月いっぱい本国へ戻ってしまった。ちょうど六ヶ月間、約半年の滞在である。ことし年内の十一月か十二月にはまたメキシコへくる。わたしどもが住んでいる、このビージャホルモツもその例外ではない。半分以上の人が居なくなった。今はひっそりとして、じつに静かでこれはたいへんありがたくうれしい。今借りている住まいは二階建て、まん中に階段があって四部屋となる。さて問題は、部屋が空いている時はよいが、そうでないとき、二階にどういう人が住んでくれるかでちがってくる。

最近の例でいうと、この五月からフランス人の独身の女性が住みはじめた。年齢は三十歳半ばかと思う。両親は隣町のアヒヒに住んでいるという。何の仕事をしているのかわからない。その彼女は来た日からじつに静かで物音ひとつしない。はたして 上階に人が住んでいるのだろうかと思わせるほどだ。ちょっと気味悪いぐらいで、ときどき心配になり、階段の下から上をのぞいたりする。

三日ほどたって、階段を降りてくるのに出くわした。「どうぞよろしく」と言ったあと開口一番「何か問題はありますか。音を立てたりしてご迷惑をかけていませんか」と、こんな調子で話しかけてくれた。こちらもうれしくなって「ぜんぜん問題ありません」「逆にわたしたちが何かありませんか」と問うてみたぐらいだ。

階段の登りくだり、ドアの開閉、床を歩く、全く音なしである。これはきっとご本人が気くばり、注意あつてのことだろう。人に不快を与えない行動、心がけでもある。それで、わたしどももすっかり気が落ちついて、午睡も心おきなくとることができるようになり、夜もよく眠れるようになってひと安心した。

さて、話は戻って上階に住む人の話だが、じつはこのフランス人の女性の以前に 何か月か住んだカナダ人夫妻は、まずドアの開閉はバタン、バタンと音を出し、そのつど階下に響いてくる。床はコトコト革靴をはいて歩く。日中からテレビの音量は上げる。とうとうたまりかねて文句を言いにいこうとしたら、家内から「少しは我慢したら」とさし止められてしまった。しかし、ある日、庭で働いたメキシコ人がテレビの音量があまりに大きいので注意しに行ってくれて、少しおさまったが、他の騒音はなくなりしなかった。この人たちは三か月ほどで居なくなってしまったが無神経さにほとほと呆れ果てた。

一年以上前に住んでいたカナダ人の女性も同様だった。何度か静かにしてもらおうよう言ったが聞き入れてくれなかった。二階の右側には、病人の老いた女性がいて、これもこれもドアの開閉の音に神経をとがらせていて、ある日、階段の上で口論が始った。驚いて下から見ると、階段の踊り場で、その彼女が、となり部屋の老女に胸ぐらをつかまえられて大げんかとなっていた。わたしはさっそくこの中の住人、理事長にこのけんかの仲裁をたのみに走った。この間、わずか五、六分のできごとだったが、あまりいい気分のするものではなかった。外国人同志のけんかもこの時初めて見た。

お互いに外国での共同生活に、楽しく過ごせるルールはあるにちがいない。外国人とはいえ、中には道理のわからぬ人も多い。教養の問題だろうか。この二人のカナダ人のモラルの欠如さをつくづく見て、世の中にはいろんな人がいるものだと思ふことにもなった。世界共通のことである。
(つづく)